

## First Asian Conference on Vision 報告

東京工業大学 像情報工学研究施設 金子寛彦

First Asian Conference on Vision (ACV: 第一回アジア視覚カンファレンス, 図1にロゴを示す)が, 日本視覚学会と韓国視覚研究グループの共催で, 2001年7月30日(月), 31日(火)の二日間の日程で開催された。開催場所は, 神奈川県逗子駅近くの高台にある, 湘南国際村センター(図2)であった。参加者は, アジア諸国を中心とした7カ国(韓国, 中国, シンガポール, マレーシア, アメリカ, オランダ, 日本, \*日本に滞在している外国籍の人々は除く)からの合計209名であった。講演件数は, 招待講演4件, 口頭発表23件, ポスター発表40件であった。会場となった湘南国際村センターは, 国際学会開催を主な目的として組織, 運営されている宿泊施設であり, 会場設備も非常によく整っている。今後, 国際学会を企画する場合には, 会場の候補の一つに考えてみてはどうか。

カンファレンスの冒頭に, 視覚学会会長の内川恵二氏から開会の挨拶があり, その中で, アジア視覚カンファレンス開催の趣旨が述べられた。それは, 近年アジア地域で視覚研究が活発になり研究者も増加してきたが, 現在開催されているARVO, ECVPなどの国際学会は, アジア地域の研究者にとって, 時間的, 金銭的, 心理的な理由によりまだ距離があるため, 特に学生などの若手研究者に身近な国際学会を作る必要があるというものであった。そして, 第一回ACV開催のこの瞬間は‘Historical moment’であると締めくくった。



図1 ACVのロゴ



図2 会場となった湘南国際村センター

開会に続いて、大澤五住氏（大阪大）の「Perspectives on the neural basis of stereoscopic vision」と題する招待講演が行われた。続いて、奥行き、眼球運動に関する内容を中心とする6件の口頭発表が行われた。次のセッションはポスター発表であった。口頭発表が行われた会場に隣接するそれほど広くないスペースに40件のポスターが張り出されたため、狭いという意見も多かったが、その狭さのせいもあって各ポスターの前には多くの人が集まり、白熱した議論が行われた。次のセッションは口頭発表であり、主に運動に関する内容の5件の発表が行われた。一日め最後の発表はL.Chen氏（Chinese University of Science and Technology）による「Functional MRI reveals form-dependent involvement of the visual form pathway in long-range apparent movement in the absence of activation of area MT」と題する招待講演であった。夕食は1Fロビーでのカジュアルな雰囲気でのSocial partyとなり、パーティ終了後も各フロアの談話室や各部屋で夜遅くまでディスカッションが続いた。

二日目は八木透氏（名古屋大学、現ニデック）の「Challenge toward visual prosthesis」という題目の招待講演で始まった。この講演は、近年の視覚機能回復に関する工学的試みを紹介するもので、非常に興味深いものであった。続いて、色覚、錐体に関連する5件の口頭発表があった。二日目午前中の最後はポスターセッションであった。昼食を挟み、午後の最初は、比較的高次の視覚機能に関する話題が6件報告された。続いて、S-W Lee氏（Korea University）の「Wearable machine vision technologies for the visually impaired」という題目の招待講演が行われた。これが、ACV最後の発表であった。口頭発表のプログラムは、時間的に非常にタイトであったにもかかわらず、座長の方々の配慮により、ほとんど予定通りの時刻にプログラムが終了した。

全ての発表の後、韓国視覚研究グループの代表であるC.S.Chung氏によって閉会の言葉が述べられた。その中で、Chung氏は今後のACVの計画に触れ、来年韓国で第二回のACVを開催することを約束した。

ACV全体を通してみると、たいへん盛況であったように思われる。参加人数も予想していたよりずっと多く、海外からも多くの人が集まった。特に、韓国以外のアジアの国々からも参加者があったことは大きな収穫であった。当初は、湘南国際村センターに宿泊する人数が学会開催割引を受けられる人数に達しないのではないかという心配もあったが、最後には部屋が足りなくなり、宿泊希望者をお断りしなければならなかった。また、学会準備段階では、英語での学会運営をするためディスカッションの盛り上がりには欠けるのではないかという懸念もあったが、その心配も無用であった。発表に対して多くの質問があり、単にアジアの視覚研究者の顔合わせという意味合いだけでなく、学術会議としても成功であったと思われる。

しかしながら、多くの問題点もあった。一つは、視覚学会夏季大会との関係である。今回は、ACVに引き続いて視覚学会大会の日本語でのセッションが開催されたわけだが、視覚学会から見れば三日間全体が視覚学会夏季大会であり、ACVから見れば二日間のカンファレンスが開催されたことになる。このような複雑な開催プログラムであったため、例えば、視覚学会ベストプレゼンテーション賞の対象者をどこから選ぶかや、予稿集をどのように編集するかなど、実行委員、組織委員のなかでいろいろな議論があった。また、ACVの運営に関しても、査読の方法をどうするか、トラベルサポートの選考をどうするか、海外からの宿泊費の支払いをどうするか等、本来であれば時間をかけて議論すべき問題を短い準備期間で実行に移したため、細かい問題が多く発生した。運営の方法に関しては、今後回数を重ねるごとに洗練されたもの

になっていくと思われる。また、国際学会ということで、予期しなかった問題も発生した。例えば入国ビザ申請の問題があったり、国際問題に発展するのではないかという不安を感じさせる不可解な参加希望メールが舞い込んだりもした（この辺に関して詳しく知りたければ、個人的に聞いてください）。使用言語に関しても、日本人の参加者が圧倒的に多かったため、ポスター会場では当然ながら日本語が多く飛び交っていた。これが、日本語、韓国語、中国語そして英語が回りじゅうから聞こえてくるようになると、アジアの国際学会らしくなるのだろう。

二日目の夜に、日本視覚学会の幹事、韓国研究グループのメンバー、中国からの参加者、ACVの実行委員が一同に会して、今回のACVの反省、今後のACVの展開などを議論する場が設けられた。その中で、次回のACVを2002年の夏に韓国で開催することが決定された。その後の計画に関しては、まだはっきりとは決まっていないが、今後少なくとも1～2年に一度のペースでACVが開催されていくことになると思われる。

これまで、日本視覚学会と韓国視覚研究グループは、1999年6月の筆者のYonsei Univ.での講演、2000年冬季視覚学会でのChung氏（Yonsei Univ.）、Lee氏（Seoul National Univ.）による講演、韓国で開催された2000年秋ICONIPでの内川氏（東工大）、近江氏（金沢工大）、塩入氏（千葉大）、西田氏（NTTCS研）の講演などを通して交流が深まり、そして今回の第一回ACVの開催という形で一応当初の目標は達成された。これまでは、ACVの開催というはっきりとした目標があったため、比較的スムーズに事が運んだように思われる。しかし、これから10年、20年とACVを維持していくためには、このカンファレンスが本当に行く価値のある学会になる必要がある。視覚学会、ARVO、ECVP、そしてVSSなど、多くの視覚研究の発表の場がある中で、それが一番難しい問題ではないだろうか。そのためには、やはり発表内容と参加者の充実が必要であろう。そして、他の学会にはない特色を持ち、位置づけを明確にして今後のACVを運営していくことが重要であると思われる。